

「サーカスは私の〈大学〉だった」



大島幹雄

「サーカスは私の大学だった」

一座の曲乗りの自伝ではなく、そんな芸達者を日本に招いて興行する仕事師の話である。綱渡りは大テントの中だけでなく、段取りをつける側もまた綱一本の上を歩くような渡世らしい。国の内外を問わず夜はたいていだれかと飲んでいる。そこで人脈を築き、深め、次の旅を生み出す。

初めての仕事は新潟空港で「国立ポリシヨイ舞台サーカス」の熊のお出迎えた。早稲田の露文科を出ているからといってロシア語が達者なわけではない。先生は熊だった。オガクズなんていう言葉

芸達者たちに魅せられて

も覚えなければいけない。「国立ドイツ動物大サーカス」大阪公演のときは一万円札専用の段ボール箱を回収して歩いた。大入りは何度か経験した。著者がかかわった国はおもに共産圏。冷戦をはさんでいることが、この特異な書に陰影を与えている。

野毛の大道芸フェスティバルには第一回から加わった。20世紀初めロシアに渡ったサーカス芸人、沢田豊の息子一家をドイツから招いた。インドの名手も出演している。彼の得意はインディアンロープだが、日本ではやっていない。すると一直線に空に伸びた綱に人が取りついて登る、あれだ。この仕掛け、著者は聞き出したという。何とか教えてもらえないだろうか。（武）

大島 幹雄 著

（こぶし書房 ☎03・3823・0524、1890円）